

舞台の構成

人間の演じる芝居と違って、太夫、三味線弾き、人形遣いの三者が、役割を分担して作品を上演します。したがって文楽は、独特の舞台構造をもっています。

舞台は客席から見て、右側に床があり、ここに義太夫を語る太夫と三味線が座ります。

床は回転式となっていて、「文楽回し」と呼びます。一つの場を語り終えると、文楽回しが回って、担当した太夫・三味線弾



きが消えます。裏側から次の場を語る太夫・三味線が現れるのです。

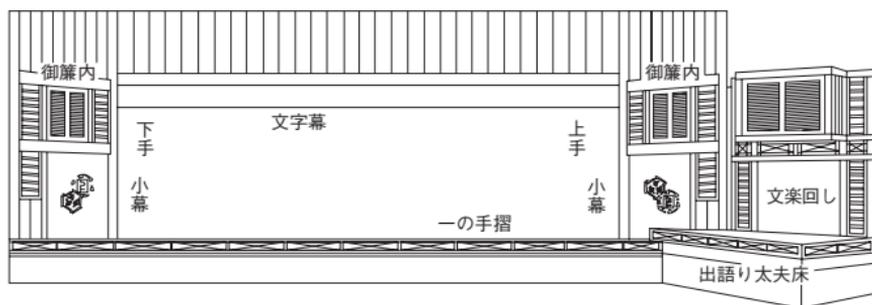
舞台は本手と呼ばれる通常の高さの後面と、舟底と呼ばれる一段低くなっている前面とに分かれています。本手に屋体が組まれ、演技は屋体の中と外で行われます。

さらに、人形遣いの持った人形の足が宙に浮いて見えないように、横一面にさえぎる板「手摺」が、本手と舟底の前部分に作られています。

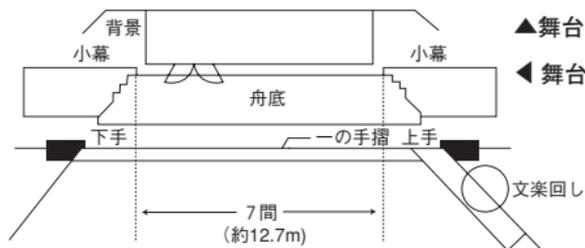
人形が遣い手と一緒に屋体から舟底へ降りるときは、本手の前の手摺を横に引いて出入り口にします。この装置を「オトシ」と呼びます。



▲国立文楽劇場



▲舞台略図(国立文楽劇場)



◀舞台平面略図